

青年期における自己形成プロセスに関する一考察  
—社会的自己・もやもやとした自己・内なる自己に焦点を当てて—

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
人間形成・臨床教育クラスター  
HA Meesun

人は社会の中で生きており、役割を担うことも、その役割を演じることもある。自己形成は、求められる役割を担う自分と素顔の自分との狭間で揺れながら行われると考えられる。本論は、他者との関わりの中での自己形成に焦点を当て、青年期の自己形成プロセスが持つ特徴について考察する。

青年期の自己形成について調査を行うために、独自に氷山の図を用い、自己への客観化を図った。また、現在の自己についての理解を深め、過去の自己を振り返り、未来の自己を見据えるという順でインタビュー調査を行った。その結果、青年期における自己形成の特徴として、「未知なる自己」と「自己の揺らぎ」を挙げることができた。未知なる自己からは、「内なる自己」の二重構造について考察し、無意識の自己について論じた。また、自己の揺らぎからは、自分自身が抱く自己への違和感について考察し、自己への違和感から自己への探求が促進され、それがまた自己形成に繋がることについても論じた。

さらに、「内なる自己」を見せられる相手について調査対象者を比較し検討することで、青年期における他者との関わりとその影響について考察した。その結果、青年期の人間関係については、大人世代との関係よりも同世代との関係に重きを置くようになることが明らかとなった。よって、青年への支援のあり方については、同世代との関係を視野に入れなければならないとの結論に至った。